

『東方』二二八二号より

言語表現は

社会的環境を反映する

真田 信治（大阪大学）

かつて、日本に来たばかりのブラジル人留学生から、「日本人の家庭では私に選択する権利も与えないうちにまずお茶が出てきます。紅茶か緑茶か、などと私自身に選ばせてほしいのに。日本人は相手を配慮すると聞いていたのですが、本当はあまり配慮をしてくれないんですね」ということを聞いてショックを受けたことがある。いちいち相手に確かめることは野暮なのであって、相手の心を察しつつ行為に及ぶことが最大の配慮だとする考え方が瓦解した瞬間であった。

本書（本論文）で対象とされているテーマの設定に関しては、右のような行動様式に対する、著者の文化的摩擦体験がその基層のところに存在しているのではないかと思っただ。事実、著者は、次のように述懐している。

言語表現には社会的環境が反映される。本論文は、筆者の長い日本での言語生活（体験）において芽生えた問題意識を基に発展させた研究課題であり、日本語を母国語としない者の視点でもって、日本語の「配慮表現」を、語彙、文法及び言語思考形態、言語行動様式、価値観などの面から探究しようとしたものである。（「あとがき」より）

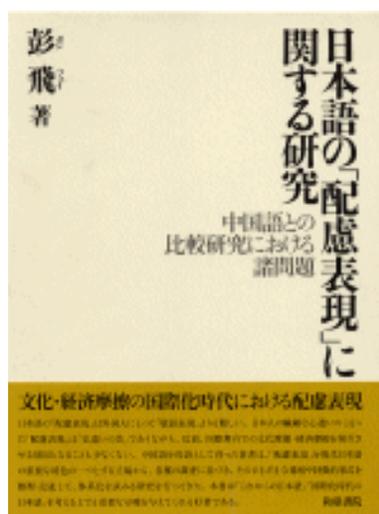
本書は、一九九三年三月に大阪市立大学に学位請求論文として提出され、博士（文学）の学位を授与された論文を

彭飛著

『日本語の「配慮表現」に関する研究

——中国語との比較における諸問題』

A5判・六二四頁・和泉書院・一三三、六五〇円



骨子として、それに加筆、修正を加えて成ったものである。

ちなみに、術語としての「配慮表現」は、著者の提唱になるものである。私は、相手に対する配慮の表現、気配りの表現、そしてそれら表現機能を総合するものとしてのポライトネス (politeness) を、日本語としては「配慮表現」と称する方が適切であろうと考えてきた者である。従来、日本では、どちらかといえば相手を上位に遇する「敬語」に焦点が当てられてきた。しかし上下という縦の関係より、身の回りの人々とどのように円滑に付き合うかという、いわば横の関係を特に重視するようになった現代人の意識が、研究の視野をも広げる結果となっている。そのような流れにおいて、著者の論調はまさに時宜にかなったものである。

ただし著者は九〇年代の半ば頃までは、上記の概念に対して「気配り表現」という術語を用いていたことを指摘し

▼『東方』282号より

一 言語表現は社会的環境を反映する

▲ 真田 信治

ておきたい。「配慮表現」の提唱は九〇年代後半からである。この間に社会的な話題となったのが「敬意表現」である。最後の国語審議会である第二二期国語審議会は、二〇〇〇年一二月に「現代社会における敬意表現」という答申をまとめ、「敬意表現」なる用語を提唱した。その答申の冒頭部分には、次のようにある。

国語審議会は現代社会の言葉遣いの在り方を考える上で重要な概念として「敬意表現」を提唱する。

敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けられている言葉遣いを意味する。

それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである。

この答申では、「敬意表現」の実例として、挨拶やお礼のことば（「おはよう」「ありがとう」など）、前置きのことば（「悪いけど」「夜分すみません」など）、そして各地の方言の多様な文末表現（「のう」「なも」「と」「と」など）、さらにはイントネーションや声の種類（優しい声など）までをも挙げている。いずれも、われわれの日常の、気配りを表すことばづかいである（私としては、日常の話しことばの運用までを行政側からとやかく言われる筋合いはないと思うのであるが）。

この動きに関して、著者は「朝日新聞」の〈論壇〉（二〇〇一年二月五日）で、『「配慮表現」の意味するもの』というコメントを発表している。ここでは、「相手に配慮した表現の重要性を強調するのは実に画期的で有意義だと思ふ。人間関係を円滑にするうえで配慮表現は重要な役割を果たしているのに、その研究は敬語に比べて遅れていたか

▶ トップページにもどる

らだ」と肯定しつつも、『「敬語」と「配慮表現」をひとくくりにして『敬意表現』とするのには賛成しかねる。敬語は敬意表現だが、配慮表現は必ずしもすべて相手に敬意を表しているとは限らない」と疑問を投げかけている。そして、たとえば、「ちよつと分からない」「ちよつと」は「分からない」を和らげるだけで、それを相手への敬意だとするのは無理があるとし、「敬意を示さない」表現までも「敬語」に括って「敬意表現」と称すること自体が配慮に欠けることではないのかと強調しているのである。

私はこのコメントによつてはじめて著者の「配慮表現」の具体的内容に触れることができた。そして私自身の従来の見解と同様の主張がそこに展開されていることに意を強くしたのであった。その経過は、拙書『方言は絶滅するか』（PHP新書、二〇〇一年）に記したところである。

ところで、著者はまこと「配慮」の人である。著者の対人関係における気配り（「配慮」）にはいつも敬服しているのであるが、本書の内容においてもそのことが窺えるように思う。鮮鋭な考察が全編に行き届いている。が、その一方でやや不満なのは、著者があまりにも日本を、そして日本語を是として見ているという点である。「配慮表現」を使う人の心映えの美しさをたたえ、それがプラス面に働くところ（良さ）ばかりに焦点を当てていることへの、何と云うか、一種の違和感である。それは、たとえば、日本料理の色彩の豊かさや歌舞伎の形式美を褒めちぎる外国人のコメントを聞くとときと同様の感覚なのである。

もちろん、日本語の「配慮表現」のマイナスマ面に関して、著者の「配慮」は行き届いている。著者は言う。「『配慮表現』の乱用と使用過剰は次のようなマイナスマ面をもたらし、ことも少なくない。たとえば、配慮しすぎてノーが言

えない、配慮しすぎて遠慮がちになる、相手への不安を取り除き、相手を安心させるための気苦労が逆に自分を不安に陥らせる。また相手を傷つけぬようにと思うあまり（気苦労）、自分が傷つきやすい心配性になってしまう、等々……。人間の作った配慮表現が逆に人間の思考、行動様式を左右してゆく。プラスに働くと人間関係がよりよい状態を保つことができるが、マイナスに働くと、人間関係をやつかいにすることになる。配慮によってがんじがらめになり、身動きがとれなくなることもなる」と。

やはり物分かりが良いというか優しいのである。すべての領域に気を配る、著者のまさに配慮の姿勢には脱帽する思いである。だがしかし、本当の配慮とは、相手との違いをよく認識した上で、相手と真剣に対峙することなのではなからうか。

冒頭で記したような、口に出さなくても察してもらいたいという論理は国際舞台では通用しないのだ、と冷徹に言い放つてほしい。特に、副題で示されている視角、著者の第一言語である中国語の立場から見た、本音の批評が聞きたいところであった。

これは、相手に合わせて行動することが本当に相手への配慮なのか、ということについて、遅まきながら考えるにいたった私自身へのつぶやきでもある。

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる